



ブータンの授業を受けた生徒たちが決めたクラスの目標。ブータンの人々から学んだ「助け合い」「協力」などが盛り込まれた



「同じ」「違う」のプラカードを掲げる生徒たち。「正解、不正解はない。自分で思ったままに答えてみましょう」と清水先生

のかわからない様子だ。
実は、この1カ月前にJICAの教師海外研修でブータンを訪れていた清水先生。「この学校の生徒たちは、自分で情報を得ることが難しく、異文化に触れ合う機会も多くありません。そんな彼らに、これまでにない出会いを提供したいと思いました」。まずは生徒がブータンに引き込まれるような雰囲気づくりをと、現地で買ってきたもので教室を彩った。
「今日はブータンについて勉強しましょう！」。現地で撮ってきた写真を見て、日本と似ていると思えば「同じ」、そうでなければ「違う」と書かれたプラカードを掲げる。うまく言葉が発するのできない生徒も参加できるように

と考えて生まれたアイデアだ。
舗装されていない砂利道、山と川に囲まれたのどかな農村、学校で授業を受ける子どもたちの様子……。同じ？違う？感じ方はそれぞれだ。ブータンのある家族が食事を取っている写真が映し出された時には、「手で食べているから日本とは違う」「でも同じように鍋を使っているよ。自分たちの生活と比べることでブータンにますます興味湧いたよう。いろいろな意見が飛び交っていた。
**他者を大切に
心を育む**
続いているテーマは、「ブータンの子どもと友達」。清水先生が写真と映像付



「こんにちはは“クスザンポー”と言うんですよ。よほど印象的だったのか、生徒たちは授業が終わっても「クスザンポー」と言い合っていた

世界とつながる
教室

幸せの国から “助け合い”を学ぶ

世界で一番幸せな国、ブータンってどんな国だろうー。
群馬県立榛名養護学校では、現地を訪れた清水香奈先生が
ブータンの人々の姿を伝える授業を行った。



ブータンと日本はどう違うの？

ガラガラガラ…

群馬県立榛名養護学校高等部、1年2組の教室のドアを開けると、生徒たちの目にいつもと違う光景が飛び込んできた。黒板にはカラフルな旗、室内にはお香の香りが漂い、聴き慣れない音楽が流れている。
教壇に立っているのは担任の清水香奈先生。身にとっているのはどこの国のものだろう、民族衣装のようだ。8人の生徒たちは、何が起こっている



「トイレはバケツの水で流しますか?」。他のクラスの生徒46人にもブータンの授業を実施し、大好評だった

きで、現地で目にしたストーリーを紹介する。「小学校のダンスの授業で、一人の男の子が鼻血を出してしまいました。すると、隣にいた子がすぐに駆け寄り、付き添って保健室へ連れて行ってあげました。さて、みんなだったら同じように行動しますか?。生徒たちは悩んだ末、一枚のプラカードを掲げた。「違う」を選んだ東正胤くんは、「ダンスの授業が好きだから、自分のことに集中してしまうと思う」と驚いていた。
日本のお土産として子どもたちに竹とんぼをプレゼントした時は、5個の竹とんぼを10人で仲良く譲り合って遊んでいた。「独り占めする人がいないんだね。これも違うなあ」。ブータンの子どもたちの話を聞きながら、一人一人が自分と向き合い始めていた。
次は清水先生が撮影してきた現地の人たちへのインタビュー映像を流すことに。「どんな時に幸せを感じるか」という質問にはこんな答えが返ってきた。「友達と優しくしてくれられた時」「家族と一緒にいる時」「周りの人が幸せなら自分もうれしい」。
画面越しに話すブータンの人たちを真剣に見つめる生徒たち。「やっぱり私も友達と遊んでいる時がうれしい。クラスのみんなとずっと一緒にいたいな」と思いました」と栗原佳菜さんは話してくれた。
授業を終えた清水先生は、「自分に自

信が持てず、人と関係を築くことを苦手とする生徒もいます。他者を思いやり、協力するといったブータンの人たちの心の豊かさを伝えることで、協調性を育んでほしい」と期待を込める。
そしてその成果は、目に見えて現れ始めた。授業中、困っている友達がいたら、「一緒にやろう」と声を掛けたり、給食の配膳もみんなで協力したりするなどの変化があちこちで見られるようになった。
助け合いの心を身に付けて、力強く社会に羽ばたいてほしい。清水先生の思いにきくと、生徒たちは応えてくれるはずだ。



生徒には文字よりイラストの方が分かりやすい。清水先生の力作だ